A R P A K ・ N E W S L E T T E R

アルパック ニュースレター

VOL136　2006年3月1日　ISSN 0918-1954

高度 11,000 m上空より望むアラスカ　マッキンリー山（6,194 m）
植村直己さんがどこかに眠るこの氷河も温暖化で後退していっているのでしょうか
（本文中に関連記事があります）

目次／contents

人・まち・地域・・・・・・・・・・・・・ 2
・京の景観形成推進プランの策定／石本幸良
・フォーラム、イベント、そしてまちづくりムーブメントへ／中塚一
・ブラジルそして伯・蘭・米３国比較／畑中直樹
・駅前のにぎわいづくりを目指して／三木健治

きんきょう・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
・みのお景観フォーラムが開催されました／坂井信行
・心和む焼物の展覧会との出会い／尾関利勝
・石見銀山へ行ってきました／森岡武
・尼崎「自然と文化の森協会」が総務大臣賞を受賞／馬場正哲
・全社研修会！次の商品企画提案競技会を開催しました／中村孝子
・新人紹介／清水紀行

まちかど・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
・個性を競いあう京都の中心部のまち／石川聡史

京の景観形成推進プランの策定（平成十七年十二月）

京都事務所／石本　幸良

平成17年12月に京都府の「京（きょう）の景観形成推進プラン」が策定されました。私も検討委員として参加しましたので、プランの概要と取り組みの流れを報告します。

策定の背景と趣旨

京都府では平成3年度に「都市景観形成マニュアル」を策定し、広域的方針や施策指針を提示して市町村の取り組みを促進してきましたが、景観条例を策定したのは4市町に止まっていました。

今回、「景観法」が施行されたこの時期を捉え、府の景観施策の前進と地域の活性化につながる、実効性のある景観形成の施策を検討する趣旨から、推進プランを策定することとなりました。

策定の進め方

京都府では新規の計画策定は「京都府式の『アクションプラン』」方式の採用を義務付けており、この推進プラン策定も17年度のアクションプランとして取り組まれました。アクションプランの基本理念は「府民参画・実行型計画」づくりで、概ね4月から8月にかけての「集中検討型計画」で進め、情報共有型・委員提案型・目標設定型計画の方針のもとに取り組みが進められました。

検討委員会は池田有隣先生（宝塚造形芸術大学大学院造形研究科長）を座長に、都市計画、景観、建築、環境等の各分野の学識者と経済界、コンサルタント、写真家、NPOメンバーの12名で構成されました。

第1回検討会が6月28日に開催され、9月6日の第4回でプラン中間案をまとめ、パブリックコメントを実施、11月18日の第5回検討会で最終確認を行い、12月に推進プランが策定されました。

京（きょう）の景観形成推進プランの概要

推進プランは「1プラン策定の趣旨、2現状と課題、3施策の基本方向、4重点施策」で構成されています。特に「プラン策定の趣旨」において古代からの歴史、文化で醸成された京都府の景観特性を明らかとし、「景観は公共的資産」であるとの認識のもと、先人から受け継いだ美しい景観を保全し、育成し、新たに創造して、次世代に引き継ぐこと、府民と市町村の連携で景観施策を推進することを位置づけています。

なお、推進プランの内容および検討委員会等の経過につきましては、京都府都市計画課のホームページの「京の景観形成推進プランのページ」をご覧ください（URL:http://www.pref.kyoto.jp/toshi/action/index.htm）。

委員としての立場と意見

私は景観まちづくりに取り組むNPO法人のメンバーとして検討委員に参加しました。平成3年度の「都市景観形成マニュアル」策定調査は弊社が受託をして、私が主担当でまとめたこと、京都の都心部で景観まちづくりを主とした活動の展開、そしてNPO法人「都心界隈まちづくりネット」の事務局長としての活動などの複合条件から委員委嘱を受けました。

これまでは様々な計画づくりの受託業務の中で、事務局の支援として委員会等に参加してきました

検討委員会の様子

が、委員として参加することは初めてのことでもあり、自分の役割をどのように発揮するかと幅広い勉強をさせて頂きました。

私がプランづくりで提案した意見は大きくは二つです。一つは長い歴史と文化から醸成された景観の重層性と、文人墨客に謳われ、物語性をともなって語り継がれ、その景観を維持するための暮らしの生態系があることが京都の景観の大きな特性であることです。二つ目は府民の景観まちづくりの取り組みで芽生え段階からの支援活動の重要性です。多くのまちづくり活動を学習し、支援してきた経験の中で初期段階で消滅した活動が多いことを踏まえ、府民活動の芽生えの初期段階から育てることが重要と認識しています。どちらもプランの中に一定の表現で盛り込むことができました。

まちづくりワークショップの開催

推進プラン（中間案）のPRと府民の景観に対する地域ニーズや景観形成への取り組みなどをプランに反映させることを目的として、例年実施している**「京都府まちづくりワークショップ」**を活用して、**「今後の景観まちづくりを考える」**と題してワークショップが開催されました。検討委員の立場からワークショップのコーディネーターの役を私が担当することとなりました。

ワークショップは第１部で一般公募から９名の府民による景観まちづくり活動や景観への思いの意見、提案発表を行いました。その後、京の景観形成推進プランの中間報告の後、第２部として発表者と府および参加市町の職員の合同でのワークショップ方式による意見交換を行いました。

ワークショップのまとめとしては中間案にある「景観形成に当たっての３つの基本視点」である、

①先人の営みを育て将来に引き継ぐ視点
②総合的空間として景観と捉える視点
③生活・生業・交流に景観を活かし維持・創造する視点

について確認することができました。「景観づくりとは住み心地がよくて、働き心地がよくて、訪れてよしの、心地よい場を、いろんな立場の人が協力して、育み育て継承すること」とまとめました。

これからの取り組み

府ではプランの具体化に向けて、平成18年度に「京都府景観条例」（仮称）の制定を予定しています。プランの中で広域的景観形成モデル地域として、「①天橋立周辺地域、②三川合流地域、③関西文化学術研究都市」で計画策定の取り組みを推進することとしており、プラン策定の取り組みと平行して、３地域での景観づくりが進められています。

弊社ではその内の「天橋立周辺景観まちづくり計画」を担当しています。17年度は広域的な景観としての「大景域」の分析と景観形成の方向性の整理を行っています。18年度に「小景域」の重点地区での景観計画づくりの検討を進めるため、現在、宮津市と岩滝町での地元組織の立上げの準備を進めています。天橋立周辺地区の景観まちづくり計画については改めて報告させて頂きます。

第５回京都府まちづくりワークショップ

フォーラム、イベント、そしてまちづくりムーブメントへ

大阪事務所／中塚　一

まちづくりの現場にいると、「報告書をつくってもまちは動かへんやんか。」「活動を伴わない計画づくりではあかん。」等の声をよくお聞きします。この数年間で、ワークショップ等を活用した市民参加型計画づくりは着実に定着し、時代は具体的な事業・活動に向けた大きな転換期にさしかかっていると感じています。

その中で、地域での緩やかな「プラットフォーム」、地域で事業を行う「まちづくりカンパニー」、地域でお金が廻る「地域ファンド」等、そのために必要な仕組みの光が霧の中で少しずつ見えてきたと思っていたのですが、実は「まずそのために、元気な人がどうやって継続的に集まるの？」という重い壁が、現場には横たわっています。

場としてのフォーラム

今年も、各地で様々な「フォーラム」が開催されています。そもそも「フォーラム」は、古代ローマの街の中心にあった広場で、参加者全員が参加して行う討議の場。個人的には、地域での「フォーラム」は、初めて会った人々が討議をするというよりも、その年の各人や各グループが行ってきた活動を報告し合い、地域での情報を共有し、新しい外部の風を少し入れながら、現時点の立ち位置や今後の方向性を確認しあう目的で行われるものと考えます。その一例として、昨年から今年にかけて、地域の方々がザワザワ集まり、ワイワイガヤガヤする場として、まちなかの社寺や歴史的な酒蔵で行われた茨木と伊丹でのフォーラムやサロンについて紹介します。

茨木神社での「いばらき楽市楽座」

現在、国レベルでは、中心市街地活性化に関して大きな政策転換が議論されていますが、その最前線の現場では、地道に商業者や住民とまちとのつながりを見直そう（よりを戻そう）と新しい動きが着実に始まっています。

「昔々、まちの真中には、市がたち、座が催されていました」

去る3月11日（土）、茨木市のまちなかでは、商業者・市民・企業・行政など、様々な町衆がつながり、まちの再生に向けたTMOフォーラム・イベントが、古くからまちのヘソであった「茨木神社」で開催されました。元気な商業者・市民が新しい業態業種にチャレンジする「まちなか元気市」、関西初上映の「らくだ銀座」（本ニュースレターの1月号を参照）の上映や、茨木市内外の元気人が集う「まちなか元気フォーラム」などなど、1日限りのイベントではなく、まちの再生に向けた新しいムーブメントを目指した試みです。

市（まちなか元気市）がたつ

具体的な内容を紹介すると、イベントとしては、元気商業者が提案するいつもとはちょっと違う「癒し」等をテーマとした新しい感覚の限定コンセプトショップや、まちなかから「うまいもん」を集め、おかずやおでんの具とし、釜で炊いたご飯と食べる「うまいもんスタジアム」、オープン・カフェの「カフェ場」、まちなかのお店から集めた「自慢の一品フェア」などが、境内で所狭しと展開されました。

茨木神社の境内のまちなか元気市

「うまいもん」をおかずに釜飯で

映画「らくだ銀座」のまちなか劇場

座（まちなか劇場）が催される

また、神社の参集殿では、映画『らくだ銀座』の上映と、はるばる東京から駆けつけていただいた総合プロデューサーである越後啓子さんの講演、まちなか元気フォーラムとして浅田美明さん（有限会社プチプランス　オーナーシェフ）、北村仁さん（株式会社TMO尼崎　事務局長）のミニ講演、活動報告として今、茨木で一番元気な春日商店街や一店逸品委員会、追手門学院大学によるチャレンジショップ「追風」、アートイベント「茨木美術環」2005などの紹介、さらに、夜の一品試食会の後、「茨木からワクワクするまちづくり」として近畿大学教授久隆浩先生をコーディネーターとしたパネルディスカッション。さらにさらに、その他会場ではガンバ決戦試合パブリックビューイングや茨木のええトコ写真展、春日商店街イベント、茨木公民館・文化講演会「ちょっと昔の茨木」などなど、まちなか全体で1日中、様々なイベントがあちらこちらで展開されました。

酒蔵で行う「伊丹文化サロン」と「伊丹都市ブランド戦略キックオフイベント」

一方、兵庫県伊丹市では、国の重要文化財である築330年の酒蔵での文化イベントと、飲食店にリノベーションした酒蔵での都市ブランドフォーラムが開催されました。

文化財で文化を食する「伊丹文化サロン」

伊丹市では、市民や市内企業、文化団体、行政が一体となり、地域活性化と伊丹からの文化発信を続けていくために、平成16年に開催された「旧岡田家酒蔵築330年記念イベント」の実行委員会のメンバーを中心に、「伊丹蔵楽部」が結成されました。

その伊丹蔵楽部が母体となって、去る平成17年10月29日に、各界で活躍されている方々をお招きし、知的で創造的な情報交換・交流の場として、第1回伊丹文化サロンが旧岡田家酒蔵で開催されました。

旧酒蔵で酒を囲んだ交流会

第1回としては、俳人の宇多喜代子さん、NHKニュース7の気象予報士の半井小絵さん、生物学者の岡田節人さんという豪華キャストで前半の講演会が開催され、その後、肩書きを外し、伊丹を愛する町衆が集い、新しい人と人とが出会う場となる交流会が開催されました。当日の岡田節人さんの講演での一節ですが、「文化というのは金もうけにも本当はなっております。これはね、確信をもって言います。一つちらっと見ただけではわからないというだけの話です。」の言葉通り、旧岡田家酒蔵という歴史ある空間での交流会は、人と人の出会いにより、新しい文化やビジネスなどを創造する場となっていく予感を感じさせてくれました。

旧岡田家酒蔵（国の重要文化財）での文化サロン

文化サロンと同じ頃、まちなかの郷町では、小学生の俳句絵と大学生によるアートを灯りで楽しむ「郷町まち灯り」が行われました。

キックオフする「伊丹都市ブランド戦略」

そして、去る2月26日（日）、伊丹の歴史・文化を活かし、伊丹独自の都市価値（都市ブランド）を創造していくための第一歩として「都市ブランドフォーラム」が酒蔵を飲食店にリノベーションした長寿蔵で開催されました。

第1部は、甲子園大学の滋野英憲先生による「まちづくりと都市ブランド」の基調講演で始まり、実際に伊丹市内でまちづくり活動を展開されている各種団体の報告として、日本発のNPO法人のTMOである「いたみタウンセンター」、市若手職員による伊丹市VI（ビジュアルアイデンティティ）戦略、「伊丹蔵楽部」、「いたみアピールプラン推進会議」、お店とミュージシャンをブッキングしPRしている「伊丹オトラク」の方々からの活動報告がありました。

第2部としてコーディネートを武庫川女子大学の角野幸博先生にお願いし、歴史街道推進協議会事務局長の井戸智樹さん、佛教大学の坪内稔典先生（俳人）、いたみアピールプラン推進協議会の森本啓一さん、伊丹市長の藤原保幸さんをパネリストに、「伊丹における都市ブランド」についてディスカッションが行われました。

そして、本フォーラムのある意味メインである第3部として、集まられた方々の人と人の出会いから新しい「都市ブランド」のアイデアが生まれる交流会が開催されました。

フォーラムでは「都市ブランド」の基本的な概念や、様々な関係者が一体となって取り組んでいくための明確な都市イメージの確立、素材の発掘、組み合わせ等、まだまだ色々な方々を巻き込みながら検討していくべき事が多いことが確認されました。まずは「都市ブランド」をキーワードとして、今後の伊丹を考えていく＜キックオフ＞となったのではないかと考えます。

つながりの一節

今回のような、フォーラムやイベントは、単に1日だけのイベントではなく、例えばイベントに来られた方の一人が「夏祭りみたい」と言われていたように、「地域の祭り」のような日常の様々な活動や様々な地域の方々の脈々と流れる「まちとのつながり」の一節になればと考えています。

また、このようなフォーラムやイベントは、活動全体の節目、節目で必要ですが、最も大切なのは、日頃の寄り合いやサロン等での「顔が見える日頃のつき合い」であることを実感しています。

小学生による俳句絵

郷町まち灯り

ブラジルそして伯・蘭・米3国比較

～海外環境関連視察報告その2～

大阪事務所／畑中　直樹

次の視察地は、アメリカ　シカゴをトランジット経由してブラジルのクリチバ、イグアスです。

クリチバ―複合施策の中で環境に取り組むまち―

1992年リオの地球サミットで、環境都市として注目をあびるようになったクリチバ市は、パラナ州（州都はサンパウロ）南部に位置し、現在も周辺地域からの流入で人口が少しずつ増えている人口160万の内陸母都市です。

クリチバ市では、神戸出身でクリチバ市の環境局長、パラナ州の環境長官も務められた中村さんらのコーディネートのもと、まちづくり公社、市環境局、環境自由大学とセミナーの場を持ち、いくつかの現地も視察しました。

このクリチバ市の環境への取り組みの特徴は、限られた財政状況の中で、まちづくり、スラム対策等の社会秩序維持施策、福祉施策、教育施策など、多様な施策課題の解決策と複合的に組み合わされている点にあり、そのいくつかをご紹介します。

＜まちづくり＋環境施策：バス交通網、開発権移転＞

クリチバのまちづくり、いわゆる都市計画の特徴としては、まず第1にバス交通があります。これは、マイカーを抑制する公共交通として、整備コストのかかる地下鉄の代わりに利便性の高いバス交通網を整備したもので、都心の乗り入れを規制するとともに幹線道路へのバス専用レーンの設置、駅のようなバス停整備、3輌編成の快速など各種タイプの運航など工夫が凝らされています。導入初期には、専用レーンへのマイカー乗り入れ規制を徹底するため赤字でも空のバスを3ヶ月走らせるなどしたそうです。

また、治水対策上の遊水地を兼ねた公園整備の際にも、土地所有者の私権を制限する代わりに他の所有地で開発する権利を認める制度を活用し、用地買収に要する費用を軽減しています。

＜社会秩序維持・福祉施策＋環境施策：環境寺小屋、緑の交換プログラム＞

ブラジルの所得水準は、親子4人の平均的な世帯で3,500レアル／月（1レアル＝約50円）ということですが、最低所得水準になると300レアル／月といったいわゆるスラム地区が存在します。十数年前には、市の工業団地予定地を600世帯が不法占拠するといったことも起きたということです。

こうした社会背景の中で、環境寺小屋は、子どもたちが学校にも行けないスラム地区の対策を兼ねた取り組みで、小学校（午前・午後の2部制）に子どもを行かせることを条件に、学校に行かない時間帯に昼食もセットで受け入れるものです。ここでは、日々、社会に関する様々なテーマ（視察日は「暴力」でした）、宿題、レクリエーションの3つのカリキュラムを持ち、以前は菜園づくりや薪でパンを焼くなど生きるための知恵も授けていたとのことです。

一方、緑の交換プログラムは、市民が集めたプラスチック等の資源化可能ごみを食料に一定割合で交換するもので、5kgのごみを1kgの食料に交換しています。ちなみに、引き取ったごみの処理費用は15レアル/t、一方、食料は市場で売れ残り等を安く調達するためそのコストは35セント/kg、さらには農業対策にもなるという、ここでも知恵が絞られています。

＜支援の仕組み：環境自由大学＞

環境自由大学は、クリチバにおける前出のような各種環境施策を支援・研究するための中間組織で、組織としてはいわゆるNPO法人のようなものです。ただし、ブラジルでは、ボランティアという概念がまだ社会的にも制度的にも確立されていないらしく、無理して働かされたと訴訟されるケースもあったようです。

イグアス国立公園―ツーリズム産業従事者が65%のイグアスのまち―

イグアス国立公園は、イグアス川をはさみブラジルとアルゼンチンにまたがる計18.5万ha（ブラジル側は6.7万ha）の広さがあり、亜熱帯気候に位置し、ヒョウをはじめとする希少種も多く、1986年には

環境寺子屋

緑の交換プログラム

ユネスコの世界自然遺産登録がなされています。

日系2.5世である坂田さんという方にガイドしていただき、私は一人しつこくヒアリングしていました。それによると、イグアスのまちは65％の人が観光関連従事者らしく、ガイドは専門学校でトレーニング100日／年程度稼働し、ガイド料は人数により40（～7名）～60（15名以上）ドルとのこと。

一方、公園の管理は、国から民間企業1社に委託されているとのことで、パークレンジャー（広義の従事者の意？）は計110名、動植物の密猟対策が課題となっているそうです。

なお、ここでは移動に電気自動車を利用したレンジャーによるエコツアー、滝の見学などをしました。

イタイプー水力発電所―中国長江ダムとならぶ世界最大級の水力発電ダム―

イタイプー水力発電所は、イグアスのまち近郊のパラナ川、パラグアイとの国境に2国共同で建設され、1974年から8年の歳月をかけて1982年に堤防が完成し、堤長8km、提高196m、貯水面積1,350km^{2}という巨大なものです。

1984年に第1タービンが稼動を始め、現在は計18タービン、1,260万kwhの発電力があり、2005年度中にはさらにタービンを2基追加し、計1,400万kwhとなるとのことです。ちなみに、タービン1基の発電力70万kwhは人口150万都市の電力需要に相当するということですから、どれだけ大きいものか察していただけるかと思います。

ちなみに「イタイプー」とは、現地の言葉で「歌を歌う石」を意味し、発電された電力はパラグアイ分がブラジル、アルゼンチンに売電されています。なお、施設に国別来訪者数が掲示してありましたが、最多はドイツでした。

伯・蘭・米3国比較

最近注目を浴びるBRIC'Sのブラジルのクリチバは、厳しい経済情勢の中で「政治的安定＋スラム対策＋環境対策」といった複数の政策課題をクリアするいわゆるwin-winとなるビジネスモデルに知恵をしぼったまちでした。ただし、開発権移転など人口増を前提とした手法はちょっと気がかりです。

現代日本が少なからず影響を受けたホンネの国オランダは、今でも海面下の国土を多く抱え、ライン川などの上流域の影響を大きく受け、地球温暖化対策をはじめとする環境政策もラディカルで、NPO、Sustainable City、エコロジカルフットプリントetc.･･･いわゆる環境先進国でした。

途中トランジットしたアメリカはまさに「アメリカンウェイ」。車、ハイウェイ、それを大前提とした都市構造、ガソリンが都市の血液でありそれ抜きでは成り立たない大量消費の国です。

ちなみに、オランダ「小さな地球」で啓発していたエコロジカルフットプリントでは、国民一人あたりのフットプリントはブラジル：オランダ：アメリカ＝1：4：8。かたや、たばこ代は200:500:800（円換算：現地調べ）、環境負荷に比例している？

ガソリン代は・・・あ、ブラジルではアルコール売ってました。

さて、振り返って、治安がいいせいか自動販売機が街中にあふれ、コンビニは24時間営業、沿道にはファミリーレストラン他が立ち並びどこの街も同じような表情、資源が乏しいのに狭い国土に自動車があふれる、チャンポンのような私たちの住む日本は？

駅前のにぎわいづくりを目指して
～商工会・大学連携による社会実験～

京都事務所／三木　健治

滋賀県のほぼ中央、琵琶湖の東に人口約５万人の野洲市というまちがあります。最近では、全国高校サッカーで優勝し、「セクシーフットボール」で一躍脚光を浴びた野洲高校のあるまちです。

野洲市は、琵琶湖に面するほか、近江富士と呼ばれる三上山を有するなど自然あふれた地域ですが、JR琵琶湖線の新快速の始発駅で、京都まで30分、大阪まで１時間の利便性から、まだ人口増加を続ける成長段階にあるまちです。

駅前の未利用地

この野洲市の玄関口となるJR野洲駅の南側に、長い間未利用地となっている工場跡地があります。これまでにも、再開発などの事業が検討されましたが、近年の社会状況から断念せざるえない状況にありました。

この跡地の有効活用について、一昨年より野洲町商工会で、立命館大学助教授石崎祥之先生を中心に検討を進めてきました。社会経済状況が低迷する中で、これといった策が見出せない状況にありましたが、こんな時期だからこそ、何かこの停滞ムードを打破することをやる必要があるといった意見や、駅を利用する人たちは、一体何を求めているのか、広く意見を求めることが必要ではないかといった意見がありました。

にぎわいづくりに向けた社会実験

そこで、現在、更地の状態にある工場跡地において、どんな機能が求められるのか、にぎわいづくりに向けた社会実験を実施し、駅前に市民の耳目を集めるとともに、多様な意見の集約を行うこととなりました。

社会実験にあたっては、商工会が実験用の店舗を確保し、企画内容の検討から実施までを、立命館大学を中心とした有志の大学生のみなさんにより行うこととしました。

計画期間が、わずか１ヶ月という短期間にも係らず、企画、地元調整、建築確認申請、保健所への申請を行い、カフェバー「Pre-Hub」とラーメン「寿」の２店舗を、11月の１ヶ月間出店することとなりました。

ちなみにPre-Hubという名前ですが、市民の交流の核（ハブ）にしたいという思いと、今回の社会実験で使用した工事現場などのプレハブ事務所をもじって名づけられています。

社会実験の効果

実施期間がわずか１ヶ月という短期間ながらも、マスコミによる報道もあり、延べ2,000人が来客し、140万円の売り上げをあげることができました。

来客者の大半は、駅を利用する方々でしたが、マスコミ報道で実験を知り、訪れたという方も多くみられました。来客者の多くは、駅前ににぎわいの場ができたことを歓迎してくれたとともに、若い世代が、まちづくりの一翼を担ってくれていることに対し、好感をもって迎えられたように思います。

実験に対するアンケートをみると、若い人のがんばりに対する共感や、新たな取り組みに対する期待する意見などが多く、地域の中に、まちを活性化したいという潜在的な意識が広くあることがうかがえました。

企画段階では、大学生が夕方以降に、お酒も出すお店を出店することに対して、駅前の交番からは難色が示されましたが、開店後は、交番のおまわりさんが一番の顧客になってくれたほか、お客さんの大

半がリピーター客で占められ、市内のパン屋さんが売り物のパンを出品してくれるなど、多くの地域の方々によって実験が支えられることとなりました。実験期間の後半になると、地域の方々から“1ヶ月間で閉店するのはもったいない”との声があがり、1ヶ月の期間延長を行うこととなりました。さらに、この実験に参加したいという新たな大学生が現れ、店舗をリニューアルして、引き続き12月も社会実施が行われることとなりました。

参加した学生のモチベーション

今回、実験に参加してくれた学生の中には、将来、自分のお店を持ちたいという夢を持つ人が何人かいました。当初、商工会側としては、大学生なら、大学祭のノリで楽しんでもらえるのではないかといった、考えで企画を進めようとしましたが、将来、自らのお店を持ちたいと考えている学生にとっては、自分の夢の実現に向けた第1歩と考えており、商工会側のスタンスを改める必要がありました。

今後、協働によるまちづくりを進めていく上では、それぞれの主体のモチベーションを如何に繋ぎ合わせることができるか、といったことが重要であると再認識することとなりました。

プレハブ店舗の活用方法

今回は、プレハブ店舗を建築して、社会実験を行いましたが、2店舗を建築する費用としては、概ね200万円程度かかりました。しかし、水回りや電気配線などの設備なども含めて、プレハブ店舗自体をキット化することができれば、さらに、コストを下げることは可能だと考えられます。

シーズン変動の大きい観光地では、恒常的な店舗設置が難しいですが、このようなプレハブ店舗を活用すると、期間限定で地域のアンテナショップや物産店を出店することや、暫定的な空き地での賑わいづくりのツールとして活用していくことが可能ではないかと考えられます。

最後に、今回の実験の大きな効果としては、地域の人たちの意識が、徐々に変化していることがあげられます。お店に訪れた人たちの中に“やればできるんだ”といった感想を残していく人が多くみられたほか、“これからも、こんな取り組みをやろうよ”という人も現れました。

このような地域の変化を捉え、今後、さらにバージョンアップした取り組みを展開していくことが求められているように感じられます。

素っ気無いプレハブを手作りのお化粧で

近所のおっちゃんの溜まり場に

みのお景観フォーラムが開催されました

大阪事務所／坂井　信行

山なみに抱かれた良好な景観を持つ箕面では景観に対する市民の意識も高く、まちなみや山なみを守る市民レベルの活動が盛んです。また、箕面市は景観施策の先進都市として、これまでにも箕面市都市景観条例に基づくさまざまな施策が展開されてきています。平成３年に現在の箕面市都市景観基本計画が策定されましたが、今般、景観法の全面施行に合わせて新たな計画の策定に向けた検討が行われています。

市民、事業者、学識者、行政で構成する景観計画検討会議では、現計画の見直しの視点や今後の景観づくりの基本的な考え方について議論が進められてきました。一方、市民の立場から景観づくりを考えていくため「暮らしの景観研究会」が組織されています。研究会では各自が設定したテーマによる自主研究に取り組んできました。

今回開催された「みのお景観フォーラム」は、今後の景観まちづくりにおいて重要な役割を果たしていくことになる市民のみなさんの意識やセンスを高めてもらうことを主眼とし、テーマを「私たちで創るこれからの箕面」としました。

ロビーでのパネル展示

パネルディスカッション

まず、今後の箕面の景観づくりの基本的な考え方についての議論の経過を、景観計画検討会議座長である近畿大学教授の久隆浩先生から報告していただきました。その後、箕面桜ヶ丘地区の大正住宅博覧会跡地における景観形成の取り組みと、宝塚雲雀丘地区の景観形成や緑化推進の取り組みについての話題提供がありました。現場で実際に活動されている方からの臨場感あふれる報告で、参加された方にとっても大きな刺激となったのではないでしょうか。

続く暮らしの景観研究会からの報告では、ロビーでのパネル展示とあわせてこれまでの取り組みが紹介されました。最後のパネルディスカッションでは、これからの箕面の景観まちづくりについて意見が交換されました。

大正住宅博覧会跡地

来年度、箕面市では新しい景観計画を策定することになりますが、市民、事業者、行政がそれぞれの立場から「私たちで創る」と思えるような取り組みこそが箕面らしい景観まちづくりといえるのでしょう。

心の和む焼物の展覧会との出会い「中国古代の暮らしと夢」展

名古屋事務所／尾関　利勝

愛知ならではのロケーションに建つ陶磁史料館

２月４日立春、大学時代の恩師からの懐かしい知らせに、中学から大学まで全く同じ学校・学科・指導教官の元に学んだ唯一の後輩と連れだって、愛知県陶磁史料館に出かけた。我が家から直接行けば車で10分ほどの近所なのだが、土曜の習わしで朝から事務所の管理指標をチェックし、都心経由で出かけたので、ずいぶん遠回りをすることになった。

半年前まで開催されていた博覧会会場の正門前、リニモの駅

から600ｍほどだが、丘陵を丸ごと抱え込んだような広大な敷地に建てられた愛知県陶磁史料館まで寒い中を歩くには抵抗感があったので、市営地下鉄藤ヶ丘駅からタクシーを利用した。敷地の広い陶磁史料館は、車を利用しても入り口から本館まで結構な距離がある。気候の良い時ならハイキング、サイクリングにはうってつけなのだが、寒さと西風には勝てない。すぐ近くに吉村順三先生、奥村昭雄先生の設計になる愛知県立芸術大学がある。同じようなロケーションに建ち、入り口から緩やかにカーブする林の中をしばらく歩く長いアプローチは、風景は少し違うがよく似ている。

近くにあっても希にしか立ち寄らない史料館だが、世界と日本、地元陶磁器の発展史を第一級の遺産、一流作家の作品とともに体系的に見せるコンテンツは国内でも有数の史料館である。欲を言えば見せ方の演出とミュージアムショップが充実していれば、間違いなく日本一と言って良いだろう。

芸術でも民芸でもない心和む焼物との出会い

中国民家の研究者でもある恩師はじめ、国立博物館、天理大学、愛知県陶磁史料館などが所蔵する中国漢代から唐代にかけての陶製明器･俑を集めた珍しい展覧会「中国古代の暮らしと夢」がこの日から３月26日まで開催されている。そのオープニングに来場された恩師に会うために出かけたのが本旨だが、お目にかかるまでの間、会場を一巡して、中国古代の陶製明器・俑が醸し出す何とも言えない生活感、リアルで愉快な表情に心が和む感動を覚えた。

陶製明器・俑は、古くから中国に伝わる副葬品の一つで、代表的なものとして知られる兵馬俑は秦の始皇帝など強大な権力者の墳墓に納められたものであるが、今回展示されている陶製明器・俑は権威を象徴するような兵馬俑とは全く異なる、手に取って見ることが出来るほど小振りのものばかり。池の上の楼閣を模した水盤には、魚、蛙、鳥が戯れ、楼閣の上では楽しげに人が宴に興ずる。農家を模した建物の２階に暮らす人、厠の下には人の排泄物をえさにする豚、アヒルが待ちかまえ、傍らの番犬がまどろむ姿に農家の風情が目に浮かぶ。焼物を通して暮らしの様がこれほど感じられる展覧会に始めて出会った。おそらく中国各地の豪族や集落支配者などの墓に生活習俗として副葬されたものに違いない。

焼物と言えば生活用具としての民芸、作家の手になる芸術作品を目にすることが多い。そのどちらでもないリアルな生活感のある暖かみに何とも言えない心の和みを感じさせられた。

染め付けからはじまった焼物の魅力がまた広がる

縁あって30代はじめから、江戸後期以後の染め付けを集めては、変化のない生活のささやかな楽しみとして暮らしの道具に利用している。いわば民芸と言われる焼物だ。我が家の染め付けの大半は明治以後が多いのだが目利きによると江戸の柿右衛門もあるようだ。

染め付けの魅力は白磁の器に呉須の青だけで描かれたシンプルな絵柄が盛りつけた料理のうまさを高めること、器だけを見ていると絵柄の筆さばきと技の巧みさを通して、職人の心意気が感じられ、しばしば器と会話してしまうほどだ。染め付けだけでこんな状態だから桃山茶器始め多彩な焼物全てにはつきあいが行き着かない。焼物の魅力とその奥深さは底知れないものがある。今また民芸でも芸術でもない中国明器・俑の得も言われぬ人間的な魅力にとりつかれそうだ。

今年いっぱい西日本各地で見ることが出来る

町田市立博物館からはじまった展覧会は愛知県陶磁史料館での開催後、４月には京都細見美術館、６月には岡山オリエンタル美術館、８月には萩美術館・山口浦上記念館、10月には大蔵考古館と各地を巡回する。是非、一見をおすすめする。詳しくは展覧会名でホームページを検索されたい。

元々は大学の恩師にお目にかかるつもりで出かけた展覧会だったが、その魅力に惹かれて、翌日、家内と連れだって見に行くことになった。

石見銀山へ行ってきました

大阪事務所／森岡　武

予期せぬお年玉

「ゆっくり来なさい」とは天の声？仕事始めも早々に、大雪の中を時速30kmそこそこで一路、島根県大田市大森町へ。そう、ここは石見銀山。一面の銀世界、さり気ない自然の演出に柏（かしわで）手。

JAPANブランド発祥の地

さて、ここ石見銀山は、16～17世紀にかけて世界の銀産出量の1／3を占め、その品質の高さからソーマ（佐摩）銀と呼ばれ、まさしくJAPANブランドの先駆けだったそうです。丁寧な手仕事や飽くなき技術開発への意欲、土地への感謝の気持ちなどがこのブランドを支えていたんだという痕跡がまちの至るところにうかがえました。

THE 日本

ブラハウス、群言堂、伝建地区、観光カリスマ、世界遺産登録と話題に事欠かない石見銀山ですが、何故この地を目指して人が集まってくるのか？ここには「日本人が忘れ去った何か大切なもの“THE 日本”」がひっそりと残っているような気がしました。

会話力「群言堂」

最盛期20万人を数えた人口も今や500人。ここにいったい何が残っているのか？それは「会話力」です。「人との会話」のみならず「自分自身との会話」、「土地との会話」、「自然との会話」です。

その象徴が“群言堂”です。今や年商十数億の婦人服を主力とする企業ブランド名として有名ですが、そもそもは、中国の言葉で「みんなで議論して決めること」。その対義語は“一言堂”というそうです。この“群言堂”という言葉自体も群言のなかから生まれたものです。

群言を誘発するまち

“群言堂”の走りは、電気、ガスといった文明を一切排除し、炭とローソクの明かりのもとで友と語り、お酒を酌み交わす小さな空間です。

また、宿泊したゲストハウス（阿部家）は、トイレとお風呂が屋外、段差はそのまま、バリアフリーとはほど遠い空間だからこそ体が忘れていた機能を呼び起こします。震えながらトイレに立つと、囲炉裏やコタツ、布団の足下に忍ばされた湯たんぽの暖かさが何とも言い難く心地よい。

“まち”が知恵をつくる

ここでは、「群言堂（会話力）＝知恵の源泉」ということに気づかされます。まちに埋め込まれた群言を誘発する人や空間に人が集まり、おいしいものを食べ、お酒を飲む。なんともゆったりとした時空間の中で五感が研ぎ澄まされ、脳は高速回転を始めている。血がめぐると言った方が適当かな？まちをつくってきたDNAとしての知恵をゆっくりと確認する瞬間です。

知恵を「つなぎ」、「ずらす」

「つなぎ」と「ずらし」という表現はこの間、お忙しい時間を割いてお付き合い頂いた松葉大吉さんの言葉です。古いだけでは面白くない、新しいだけでは伝わらない、古いものをつないでいって、少しずらしてやる。新しいものを生み出す源泉は、実はすごく身近なところに眠っている‥。それに気づく仕掛けこそが、今まちづくりに求められているような気がします。

石見銀山生活文化研究所

群言堂本店中庭から

群言堂玄関

このネコが一番の観光資源？

尼崎「自然と文化の森協会」が総務大臣賞を受賞

大阪事務所／馬場　正哲

何のためにまちづくりか

地域でのまちづくりは、市民参加から市民主体のまちづくりへ各地で芽吹きつつありますが、ここにきて、都市化したまちでの、人と人との根本関係と何のための活動かが問い直される時期に来ていると実感しています。

昔、薩摩に郷中教育という、青少年に「負けるな」「うそを言うな」「弱い者をいじめるな」、徹底して話し合うことをおしえた自治があったと聞きます。地域地域でこのような人間の培った、相手を理解する知恵や地域意識の断絶が心配です。

ひとの理解や地域理解の無い活動は、えてして「為にする」ことのぶつかりあいとなってしまいます。動かなかった地域での前衛としての活動から、今一度、地域の相互の理解の下に、本心で目標を共有し達成する、楽しみ合う、まちづくりへの深化が課題といえます。地域のガバナンスの再生に繋がる課題です。

協働型まちづくりのモデルに挑戦

「自然と文化の森協会」は、尼崎市総合計画の協働型まちづくりのモデルとして、市制80周年記念事業と冠して、市と市民が協働により策定した「自然と文化の森構想」の推進役を任じ、自立した市民活動団体として平成14年5月に設立されました。（本紙Vol.105号・115号・128号・130号で紹介）以来、見失われつつある尼崎北東部、園田の地域に残されている自然や歴史・文化をもう一度振り返り、見つめ直し、そして活用しながら、次の世代へと引き継ぐための活動に、地域の方や行政並びに学識者の力添えを得ながら取り組んできました。

地域づくり総務大臣表彰を受賞

この「自然と文化の森協会」の活動が、平成17年度地域づくり総務大臣表彰を受けました。地域の個性豊かな発想を活かし、住民を始めとして様々な主体が取り組む魅力あふれる地域づくりを積極的に推進し、顕著な功績のあった市区町村及び地域づくり団体を表彰し、その功績をたたえ、広く全国に周知することにより、地域づくりの更なる発展を図る表彰です。

評価された点は、「工業都市、公害イメージの都市において、自然や文化の地域資産の掘り起こしを行って、イメージアップに寄与している。クリーンなまちへ変容させることの取り組みを評価。他団体との連携が図れている点、自然に親しむ広範囲な活動を行っている点が評価できる。」と報じられています。

目標年の中間点に立って

この受賞は、これからの活動に大きな期待と課題を提起しています。本年は市政90周年の記念の年でもあり「自然と文化の森構想」の目標年・市政100周年の中間期の年でもあります。実績が評価される段階から、多様な地域の理解とリーダーシップが求められる段階に入って、地縁的な組織などから別次元でこれた時期から、地域に責任を持つガバナンスの自覚が問われることとなるのではないでしょうか。より柔軟で可変的な組織活動と地域課題を担う気概が問われます。昔の上意下達の文化でない、自由で平等な人間の本質的な生き方に根ざす新たな規範・文化の創造へ夢開きます。

藻川

猪名寺廃寺万葉コンサート

全社研修会！次の商品企画提案競技会を開催しました

大阪事務所／中村　孝子

成熟社会での経済停滞と自治体財政の深刻な状況下、社会の変化や経済財政改革の推進（三位一体改革や民営化推進）などにより、社会システムの大きな変化とともに混乱が確実に進行してきています。

アルパックがこの中で役立っていくためには、より一層の地域社会への貢献と新しい社会の展望を持つ必要があると思います。

毎年開催している全社研修会では、全所員が一堂に会し、様々に広がる業務分野や先進業務の報告などを行い討議し、次の時代に対応した職能ビジョンを明確にするために、アクションプログラムを

企画しています。

今年も２月４日、ウィングス京都（京都市中京区）で全社研修会を開催しました。「何故、こんな年末年始の時期に。おまけに年度末に！」のブーイングを浴びながら、今回は例年とは異なり、所員が10チームに分かれ、「次の商品企画提案競技会」と銘打って社内コンペを行うことになりました。

いい企画提案をするには、内容とともに、プレゼンの方法も大切です。そこで、開催前の事前学習として２回のプレセミナーを実施しました。１回目は、株式会社電通関西支社クリエイティブ事業局次長の笠井良平氏を講師にお迎えし「アルパックの提案競技におけるプレゼンテーションの方法と根本問題」のお話と意見交換をいただき、２回目は近畿大学教授久隆浩氏を講師に「これからの時代とまちづくり専門家の展望セミナー：市民事業時代の専門家の役割と課題」と題して講演いただきました。講演を受けて、研修会への機運も高まったところで、各チームは発表内容をつめていきました。

さて、いよいよ研修会の当日です。プレセミナーの効果もあって、市民に向けた企画提案やプレゼンの方法など各チーム総力を発揮した内容でした。

そのうち一部を紹介すると「新職能モデル」、「学校・講座支援」、「拠点づくり」、「ファンドの設立」、「遊休地活用支援」、「ゆるゆる生活」などバラエティーに富んだ内容で、プレゼンの方法もペーパーによるものからパワーポイントでの完璧プレゼンや、中には吉本新喜劇パリのものまで様々なノリとなりました。

採点は、「テーマの意義」、「実現性」、「プレゼン力」、「トータル評価」の項目で、参加所員全員が評点を行いました。忙しい中で準備を進めてきた甲斐あって、社長賞、副社長賞、実行委員会賞を受賞したチームの喜びは大きかったことでしょう。

研修会後の社員の感想としては、「商品開発を進めていく上で、チーム間をこえて連携・協力し、より精度の高い商品づくりを目指そう」、「忙しい時期だが、所員が一丸となって提案ができた。その

プロセスは良かった」、「社長賞提案の結果は、今やっていることが新しいことという視点で評価に結びついた感がある」、「チームでの議論やコミュニケーションができた。普段の会議より熱心な取り組みができた。」などで、実り多き研修会だったと思います。

さて、各グループの発表内容の詳細は、企業秘密？ですから、紙面には掲載できません（笑）。しかし、これから色々な地域のまちづくりの現場で、大いに成果を発揮し、まちづくりのお手伝いができると思います。

新・人 紹・介

大阪事務所／清水紀行

今年１月に大阪事務所に入社しました清水です。最近、本や雑誌の中で心に残った言葉を書き留めるようにしています。その中のひとつに次のような言葉があります。『人生は一冊の書物に似ている。愚かなものはそれをぺらぺらめくるが、賢いものは丹念に読む』これはあるスポーツ選手にインタビューした記者が選手を評する際に使った言葉で、「競技の為に努力を惜しまず、決してぶれる事ない精神力を育み…常に初心と周囲への感謝を忘れない選手…」と言った意味が込められていたようです。これは私達の仕事においても同様です。自分自身の努力と周囲のサポートがあって初めて良い仕事ができるはずです。私も何気なく過ぎ去りがちな日常を大切にしつつ感謝の気持ちを忘れず、新たな環境で頑張りたいと思いますのでこれから宜しくお願い致します。

まちかど

個性を競いあう京都の中心部のまち
さて、次の展開は

京都事務所／石川　聡史

オープン5周年を迎えた新風館

さる2月4日にアルパックでは、次の時代の新規事業をテーマにした研修会を行いましたが、その会場となったウイングス京都という建物から北に数分歩いたところに新風館という商業施設があります。

新風館は京都の中心部を南北に貫く烏丸通に接し、近代建築が多いことで有名な三条通と住民活動が活発に行われていることでこのニュースレターにもたびたび登場している姉小路通の間に位置しています。

その新風館は、大正15年に建てられた旧京都電話局（83年に京都市の登録文化財第一号に指定）のリノベーションで、情報発信型商業施設として2001年1月にオープン。レトロな外観と若者に人気のブランドショップや飲食店などによって、すっかりこの地区のランドマークとして根付いており、オフィスビルが建ち並ぶ烏丸通沿いにカフェや書店ができるなど新風館を中心とした新たな商業ゾーンも形成されつつあります。また、一時期、都心部から離れた若者の商業ニーズを中心部に呼び戻す牽引力ともなりました。

一方、新風館の南側に接する三条通。京都文化博物館など明治から大正にかけての近代建築で有名な通りですが、実際には近代建築のほか、新しい商業ビル、町家、集合住宅、業務ビルなど様々な建物のある通りとなっており、平日でも多くの若者でにぎわっています。

北側に接する姉小路通は、住民の皆さんの着実なまちづくり活動により、町家を中心に落ち着いた雰囲気のまちが形成されつつあります。

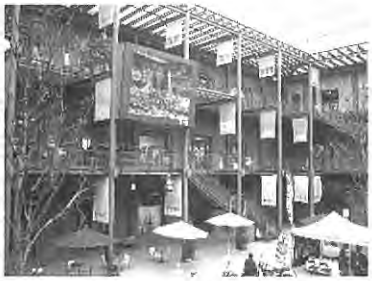
このあたりには個性豊かな店が多く、自分にあった店を探しながら歩くだけでも十分に楽しめる界隈となっています。

次のまちづくりの展開に期待

これらは、いずれも歴史・文化遺産と新しいものとが融合した京都のまちづくりのひとつですが、その姿は常に変化しています。

ここ数年、過熱気味の町家ブームが続いていますが、次はどんなまちづくりが展開されるのでしょうか。新たな展開を期待したいと思います。

新風館外観


新風館の様子：この日は大型バイクの展示会が行われていた

近代建築が建ち並ぶ三条通

アルパック(株)地域計画建築研究所

http://www.arpak.co.jp　E-mail info@arpak.co.jp

本　社
京都事務所　〒600-8007　京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82　TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764
大阪事務所　〒540-0001　大阪市中央区城見1-4-70 住友生命OBPプラザビル15F　TEL(06)6942-5732　FAX(06)6941-7478
名古屋事務所　〒460-0003　名古屋市中区錦1-19-24 名古屋第一ビル8F　TEL(052)202-1411　FAX(052)220-3760
東京事務所　〒186-0001　東京都国立市北1-1-17 田畑ビル3F　TEL(042)501-2531　FAX(042)501-3024　分室／TEL(03)3226-9130
九州事務所　（株）よかネット　〒810-0802　福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F　TEL(092)283-2121　FAX(092)283-2128